

# けいざんぜんじ 「瑩山禅師」

平成22年 1月 第4週放送

けいざんぜんじ、 どうげんぜんじ な じゅうごねんご えちぜん たね う  
瑩山禅師は、道元禅師が亡くなられてから十五年後、越前の国の多彌というところでお生まれになりま  
かんのんさま しんこう しんこうしんあつ けいざんぜんじ はっさい かみ えいへいじ  
した。観音様を熱心に信仰する母親のもとで、信仰心篤く育った瑩山禅師は、八歳で髪をそり、永平寺  
さんだいめ ぎかいぜんじ しゅぎょう はい  
三代目の義介禅師について修行に入りました。

じゅうさんさい えいへいじにだいめ えじょうぜんじ せいしき そうりょ ぎしき  
十三歳の時、永平寺二代目の懷英禅師のもとで、正式に僧侶となる儀式をうけます。

にだいめ さんだいめ ぜんじ おし う けいざんぜんじ そうりょ りきりょう そな  
二代目、三代目の禅師からたっぷりと教えを受けた瑩山禅師は、僧侶としてのすぐれた力量を備えて  
いきました。

えじょう あと けいざん しゅうは じいん  
二代目の懷英禅師が亡くなられた後、瑩山禅師は、永平寺を出て、宗派にこだわらず、さまざまな寺院を  
おとす しゅぎょう りきりょう みが  
訪れ修行をし、自らの力量を磨いていきます。

あわ くに じょうまんじ じゅうしょく よねんかん いっぱん ぶっきょうと ぎしき  
そして、阿波の国に城満寺を開き、住職であった四年間、多くの一般の人々に、仏教徒になる儀式  
かが くに だいじょうじ うつ けいざん じゅうよう ちょしよ でんこうろく  
をおこなっています。次いで加賀の国の大乘寺に移り、瑩山禅師の重要な著書のひとつ『伝光録』  
こうぎ おこな  
のもとになる講義を行いました。

ご けいざん のと ようこうじ ひら のと くしひ しょう げんざい いしかわけんわじまし  
その後、瑩山禅師は、能登に永光寺を開き、1324年、能登の櫛比の庄（現在の石川県輪島市  
もんぜんまち そうじじ こんりゅう そうじじ めいじ たいか みま き よこはましつるみく  
門前町）に、總持寺を建立します。總持寺は、明治31年に大火に見舞われ、これを機に、横浜市鶴見区に  
うつ のと そうじじ ご そうじじそいん さいけん  
移されますが、能登の總持寺はその後、總持寺祖院として再建されています。

けいざん いっぱん じゅうし あわ じょうまんじ よねんかん ぶっきょうと  
瑩山禅師は、一般の人々との関係を重視しました。阿波の城満寺の四年間、多くの人々に、仏教徒と  
ぎしき  
なる儀式を行ったのは、そのあらわれの一つでしょう。

どうげんぜんじ ひとびと だんじょびょうどう しせい つよ  
禅師は、道元禅師の教えを、ひろく人々に伝えようとしたのです。特に、男女平等の姿勢を強く打ち  
とうじ しゃかいつうねん かっきてき しせい  
出しました。これは当時の社会通念を考えると、画期的な姿勢でした。

けいざん いた にほんじゅう  
このようにして、道元禅師の教えが、瑩山禅師に至り、日本中に広がり始めるのです。

ひといちばい くだ けいざんぜんし ざぜん の ことば しょうかい  
教えを人々に伝えることに人一倍心を砕いた瑩山禅師の、坐禅について述べた言葉を紹介します。

おお じひ ところ ざぜん . . . くとく いっさい い い  
「いつも大いなる慈悲の心をもって、坐禅のはかることの出来ないほどの功德を、一切の生きとし生けるも  
めぐ む  
のに、廻らし向けなさい」

1325年、能登の永光寺で、瑩山禪師は亡くなりました。五十八歳の秋のことでした。